

『明儒学案』における「慎独」の展開

難波征男

一、はじめに——『明儒学案』は慎独史

「慎独（独を慎む）」は『大学』『中庸』の三箇所に登場する。儒学の中でも特に『大学』『中庸』を尊重する朱子学や陽明学の新儒学（宋明学とか性理学とも呼ばれている）では、この「慎独」をどのように理解するかによって、儒学思想家それぞれの人間観世界観がさまざまに形成され、彼らの経世済民や修己治人の実践方法は千変万化する。先ず、この三箇所の「慎独」を見ておこう。

所謂その意を誠にするは、自ら欺くことなきなり。悪臭を悪むが如く、好色を好むが如し。此れをこれ自ら謙しと謂う。故に君子は必ずその独を慎むなり。

小人は閑居して不善を為し、至らざる所なし。君子を見て、而后、厭然としてその不善を拵い、而してその善を著す。人の己を視ること、その肺肝を見るが如くして然らば、則ち何の益かこれあらん。此れを中に誠に於て、外に形ると謂う。故に君子は必ずその独を慎むなり。

曾子そうし曰く、十目の視る所、十手の指す所、それ嚴げんなるかなと。富は屋を潤うるし、徳は身を潤うるし、心は広く体は胖ゆたかかなり。故に君子はその意を誠まことにす。
 『大学章句』伝六章・誠意を積す

天命、これを性せいと謂いう。性せいに率りつう、これを道みちと謂いう。道みちを修おさむ、これを教けうと謂いう。道みちなるものは、須臾しゆゆも離はなる可べからざるなり。離はなる可べきは道みちに非あらざるなり。

この故に君子は、その睹みえざる所を戒かい慎しんし、その聞きこえざる所を恐きょう懼くす。隠いんより見けん(現)なるはなく、微びより顯けんなるはなし。故に君子はその独どくを慎つつしむなり。

喜怒哀樂きどあいらくの未發みはつ、これを中ちゆうと謂いう。發はつして而して皆節せつに中あたる、これを和わと謂いう。中ちゆうなるものは天下の大本たいほんなり。和わなるものは天下の達道たつどうなり。中和ちゆうわを致いたさば、天地は位くらし、萬物ばんぶつは育いく。
 『中庸章句』第二章

儒学は理想主義1である。人が理想的人物として生きる筋道や道理を「道」とすれば、人はこの道から外れないように細心の注意を払わなければならないであろう。新儒学を集大成した朱熹(一一三〇〜一二〇〇)は、この道を「人や物は各おののその性に循したがへば、則すなちその日用事物の間、各おのの当まさに行ふべきの路あらざるなし。これ則すなち所謂道いわゆるなり」と規定し、「蓋し、人は己に性を有するを知らず、その天より出るを知らず。事に道あるを知らず、その性によるを知らず。聖人に教あるを知らず、その吾の固有する所のものに因よつてこれを裁するを知らず」と戒告3している。何を何によつて裁くのか。

朱熹によれば、「性や道は同じと雖も、氣稟きひん或いは異なる。故に過不及の差なき能はず。聖人は人や物の当まさに行ふべき所のものに因よつて、これを品節し以て法を天下に為す。これを教と謂ふ。礼楽刑政の属のごとき、これなり」4。

つまり、人の気稟における過不及の誤差を「教」によって修正するのである。「教」は「道を修めること」であるが、この「道」が人の本質である「独」である。道を修めるために、「君子はその独を慎む」。新儒学者たちが、日々工夫のなかで慎独を最も重要視する理論的根拠はここにあると言えるであろう。

この慎独の具体的工夫が「その暗えざる所を戒慎し、その聞こえざる所を恐懼す」⁵であるが、これについて朱熹は「人欲、將に萌さんとするを遏めて、それをして隱微の中に潜かに滋り暗かに長じて、以て道を離るるの遠きに至らしめざる所以なり」と具体的実践的に解説している。⁶

以上、朱子学による「慎独」の解釈を整理してきたが、明朝儒学史の中に真の儒学を求めて編集された黄宗羲（一六一〇～一六九五）の『明儒学案』は、先行する宋学（朱子学）の慎独観から王陽明の「致良知説による独自の慎独解釈」を経て、明末の大儒劉宗周（一五七八～一六四五）の「慎独を工夫とする誠意説」に至るまでの慎独史と言っても過言ではなからう。⁷

以下、この観点から『明儒学案』の中に慎独史の具体的展開を考察し、『明儒学案』の儒学史観を再検討したい。

二、仇兆鰲の『明儒学案』序文——康熙三十年代の慎独評価

宗羲の弟子仇兆鰲は、宗周の慎独とそれを顕彰した『明儒学案』について、その儒学道統史上の意義を次のように述べている。但し以下、書き下し文の段落分けと（ ）内の補注は筆者による。

孔孟の学、宋儒に至って大いに顕らかなり。明初、宋儒の伝を得る者は、南に方正学（孝孺 一三五七～一四〇

二 先生の浙東に首倡するあり、北に薛敬軒(瑄 一三八九〜一四六四)先生の山右(太行山の右側 山西省)に奮起するあり、一は則ち踵を金華(宋濂 一三二〇〜一三八二)に接し、一は則ち響を月川(曹端 一三七六〜一四三四)に嗣ぎ、その学は皆、程朱に原本づくものなり。独り天台(方孝孺・建文帝の侍講)のみは靖難の余(二三九九 燕王・後の永楽帝のクーデター)に対して、方孝孺はこれを「謀反」として抵抗し、一族が残虐に処刑された。その後、真の儒学者の多くは野に隠れ科挙に応じなくなった)を経て、(道学の)淵源は遂に絶ゆ。

康斎(呉余弼 一三九一〜一四六九)の鐸を崇仁(江西省)に振りしより、陽明(王守仁 一四七二〜一五二八)の壇を舜水(浙江省余姚)に築くは、それ斯道絶えて復たび続ぐるの機か。

当時、康斎に従学する者に陳公白沙(陳獻章 一四二八〜一五〇〇)あり。而るに甘泉(湛若水 一四六六〜一五六〇)の「随处に天理を体認す」は、以て新会(陳白沙)の偏を救ふに足る。その、緒を姚江(陽明)に續ぐ者に龍溪(王畿 一四九八〜一五八三)・近溪(羅汝芳 一五一五〜一五八八)あり。而るに東廓(鄒守益 一四九一〜一五六二)の「戒懼に従つて性を覓む」、念庵(羅洪先 一五〇四〜一五六四)の「無私に従つて仁を識る」も、亦以て二溪の謬りを糾すに足る。両家に就いて論ずれば、白沙の「端倪を静養す」は周子の主静の説に非ざらんや。陽明の「その良知を致す」は孟子の良知の説に非ざらんや。然り而して意は单提を主とし、説は偏嚮に帰して、遂に後来の紛紜異同の議を起こすのみ。

然りと雖も、白沙の学は収斂して裏に近ふに在りて、一時のその教を宗とする者は、能く声華に淡にして榮利に薄く、闇修独行の士たるを失はず。陽明の門のごときは、道広くして而も才高く、その流は弊(害)なき能はず。惟だ道広ければ、則ち行檢(品行)修まらざる者も亦その中に入出入するを得、唯だ才高ければ、則ちその雄弁を騁せ以て世を驚かせて人を惑はすに足る。二溪(王畿 一四九八〜一五八三)・羅汝芳(一五一五〜一五八八)の

外、更に大洲（趙貞吉 一五〇八〜一五七六）・復所（楊起元 一五四七〜一五九九）・海門（周汝登 一五四七〜一六二九）・石簣（陶望齡 一五六二生）の諸公、舌、瀾翻を底し、自ら幽を探り微を抉ると謂ふ。説を為すこと愈よ精にして、道を去ること愈よ遠し、程子の所謂「彌よ理に近くして、大いに真を乱す」もの、これはそれこれに似たり。これより後、東林学興り、涇陽（顧憲成 一五五〇〜一六一二）・景逸（高攀龍 一五六二〜一六二六）の諸君子のごときは、皆以て道脈を維持するに足れり。而して戴山劉子（劉宗周 一五七八〜一六四五）、一生の用功は惟だ慎独に在れば、則ち孔孟程朱の学をば合して一と為し、その陽明を補うあることは小にあらざるなり。

（『明儒学案』仇兆鰲序）

兆鰲の序文を足がかりにして、宗羲の明代儒学史観を概略すれば、次のようになるだろう。

- ① 明学は宋の程朱学を継承して出発した。
- ② 明初に起こった永楽帝による大儒方孝孺一族処刑から、真儒たちは在野にあつて朱子学の真髄を継承し、任官して御用学の俗儒に陥落することを避けた。
- ③ やがて、身心の体認を重視した呉康斎の朱子学が陳白沙に継承され、更に白沙門下の高弟湛甘泉は白沙の主静に偏重する面を救済して、「（動静両場面において）随处に天理を体認する」説を主唱した。この甘泉思想は許敬庵を経て劉宗周の慎独思想形成に一定の影響を与えている。
- ④ 甘泉と同時代の王陽明は、当時の社会を指導していたエリート官僚が自己の認識や判断のままに行動できない知行分裂にあり、これが政治や社会の混迷の元凶である。そして、その根本原因は官僚が習得していた俗物朱子学による知先行後の人間観にあると見抜いていた。みずからも朱子学者であつた陽明は、左遷先の貴陽竜場の地

で、知行の分裂を許さない「知行合一の本体」を大悟し、これを独自の人間観に錬成して「致良知」説を提唱した。陽明学の誕生である。この陽明学を兆鰲は、「斯道（真の儒学の道）絶えて、復たび続ぐるの機か」と、言わばこれを儒学復活の狼煙と認めている。

⑤ ところが、陽明学は朱子学の定理を否定し、各人が体感する心（良知）によって新しく理を設定しなおすために、本質的に一人一派の良知運動であり、各人の個性や社会体験によって多種多様な思想模様を展開する。その結果、陽明後学の運動からは新機軸を自由奔放に求める運動を生み出したが、それが公序道徳を逸脱して放縦自恣に流れる面も露呈した。兆鰲は宗羲の見解を踏襲し、それを一段と明晰にして「陽明の門のごときは、道広くして而も才高く、その流は弊（害）なき能はず。惟だ道広ければ、則ち行檢（品行）修まらざる者も亦その中に入するを得、唯だ才高ければ、則ちその雄弁を騁せ以て世を驚かせて人を惑はすに足る」と説明している。兆鰲は、特に強大な社会的影響力を持っていた王龍溪・羅近溪・趙大洲・楊復所・周海門・陶石簣等の所謂無善無惡派・良知現成派に対しては、「説を為すこと愈よ精にして、道を去ること愈よ遠し」と痛罵している。

陽明後学の中で、王龍溪や羅近溪に対抗したのは、「戒懼」「無私」の工夫によって本心の徳性を発動することを重視した鄒東廓や羅念庵であった。彼らの良知運動は工夫によって良知本体の存養に努め、存養された良知の知行に誠実であろうとするものである。宗羲は、陽明後学の中では「姚江の学は、惟だ江右のみその伝を得、東廓・念庵・（劉）両峰（劉文敏 一四九〇〜一五七二）・（聶）双江（聶豹 一四八七〜一五六三）はその選なり。・・陽明の道、頼りて以て墜ちず。蓋し陽明一生の精神は、俱に江右に在り」と認可している。

『明儒学案』卷十六 江右王門学案一・文莊鄒東廓先生守益において宗羲は、初めて陽明に面談した東廓が、陽明の慎独觀を聴いて弟子になる物語を次のように紹介している。

初めて文成(陽明)を虔台に見、父の墓を表するを求め、殊に学に意なきなり。文成は顧つて日夕学を談ずれば、(東廓)先生忽ち省することありて曰く、「往きに吾、程朱の大学に補し格物窮理を先にすれども、中庸は慎独を首にするを疑ふ。両つながら相蒙からず、今釈然たり、格致するは即ち独を慎むなり」と。遂に弟子と称す。

このエピソードによれば、「陽明の道」を正統に継承することになる東廓が陽明学に入門する直接の契機は、慎独と格物致知との関係問題であった。工夫を重視する東廓の陽明学を、宗羲は「先生の学は、力を敬に得。敬なるものは、良知の精明にして、雑ふるに塵俗を以てせざるものなり。吾が性体は日用の倫物の中に行はれ、動静を分かつたず昼夜を舍かず、停機あることなし。流行の宜しきに合する処、これを善と謂ふ。その障蔽されて壅塞さるる処、これを不善と謂ふ。蓋し一たび戒懼を忘るれば、則ち障蔽されて壅塞さる。但だ往くとして戒懼の流行に非ざることなからしむれば、即ちこれ性体の流行なり。戒慎恐戒懼を離却すれば、従つて性を覓るなし。性を離却すれば、亦従つて日用の倫物を覓るなきなり」と説明している。宗羲の考える陽明学がこの辺にあり、これが宗周の慎独を工夫とする誠意説へ連動するであろうと予測するのは容易である。

⑥ 民変抗租奴変、官界腐敗、宦官横暴、異民族侵攻、明王朝崩壊と積年の致命的な汚染構造が招いた国家的民族的危機の中で、官界や書院を拠点にして民衆とともに清議を貫徹し、抵抗―挫折―学習―殉死の先頭に立つて後世に「道脈を維持した」のが、東林学の顧憲成・高攀龍・宗羲の父の黄尊素(一五八五―一六二六)等の新朱子学者と、新陽明学者の劉宗周であった。宗羲は、東林学指導者の黄尊素の長男だが、尊素が宦官派によって投獄され虐殺された後、その父の遺言により宗周の直弟子となり、宗周思想を継承し、その顕彰に生涯を尽した。この宗

羲を師と仰ぐ兆鰲は、宗周の慎独説を「孔孟程朱の学をば合して一と為し、その陽明を補うあることは小にあらざるなり」と推称し、これを継承することが優秀な漢族文化を復興する道であると考えている。

⑦ 以上から兆鰲は、『明儒学案』を著述した宗羲の編集方法や人品を「己の意に執して去取を為さざるは、蓋し以後世の公論を俟つのみ」「学問人品は誠に卓然として諸儒に愧じず」と絶賛する。

しかし、王陽明に対する宗羲の評価に関しては「独り陽明先生に於いて敢へて少しも微詞あらざるは、蓋しその郷に生まるる者、多く前輩を推尊すること、理固より然るならん」と、微妙な表現をしている。兆鰲はその理由を明言していないが、王龍溪・羅近溪以下の「流弊」をもたらした責任の一端を陽明自身に見ていたのかもしれない。

宗羲は「浙東の学派は、最も流弊多し。有明の學術は、(陳)白沙その端を開き、姚江(王陽明)に至って始めて大いに明らかなり。・先師戡山(宗周)に逮及んで、學術の流弊、救正さるること殆んど盡さる。もし姚江なかりせば、則ち学派は中絶せり。もし戡山なかりせば、則ち流弊は充塞せり」(『移史館論不宜立理學傳書』¹¹)と指摘しているように、陽明の復興した学派を宗周が正統に継承したと考えて、陽明の致良知と宗周の慎独の根本は合致していると認識する。

しかし、このような宗羲の見解に対して、陽明門流の弊害を救済した宗周の慎独を陽明の致良知より高いと評価する兆鰲は、不満であったと思われる。この兆鰲と宗羲の差は、何処から来るのか。いろいろな理由が考えられるだろうが、兆鰲が『明儒学案』の序文を著述した康熙三十二年は明王朝が壊滅してから既に四十八年を経っており、当時の陽明学評価や宗周評価の変化、宋明心性学から清朝考証学への学問移行等が微妙に反映しているのかも知れない。この課題は別稿で考察するとして、ここでは康熙の進士で吏部右侍郎の兆鰲が、宗周の慎独説を

陽明の致良知説よりも高く評価していたことに注目しておこう。

三、『明儒学案』における慎独の展開

『明儒学案』に収録されている各儒学者の「慎独」を観ると、二種類に大別することができるであろう。第一は独の実体を例えば独知とか良知というように知と認識する型であり、第二は独の本体を意と認識する型である。以下、その代表的なものを列記してみる。

①呉康斎「人生はただ能く神明に負かざれば、則ち窮か通か死か生かは、みな惜しむに足らず。かくの如く求めんと欲すれば、それ惟だ慎独のみか。」
(二巻 崇仁学案一)

②胡敬齋「容貌辞気の上に工夫を做す。便ちこれ実学、慎独はこれ要なり。」
(二巻 崇仁学案二)

③呂涇野「康恕問う、戒慎恐懼はこれ静存、慎独はこれ動察なるや否やと。先生曰く、只これ一個の工夫なり。静は動を主とする所以、動は静に合する所以なり。睹えず聞こえざるは静なり。而して戒慎恐懼は便ち惺惺、これ便ち動に属し了る。」
(八巻 河東学案下)

④楊斛山「天命を性と謂い、天人は一理なり。性に率うを道と謂い、動くに天を以てするなり。道を修むるを教と謂い、天に合するを求むなり。戒慎慎独は修の功より中と和に至るまでなり。中和は性命本然の則なり、能くこれを致せば、則ち動くに天を以てす、故にその効は天地位し万物育するに至る。」
(九巻 三原学案)

⑤王陽明「良知は即ち独知」「慎独は即ち致良知」

(十巻 姚江学案 宗周『陽明伝信録』)

⑥ 錢緒山「中和を致すの工夫は、全て慎独に在り。所謂隱微顯見は已にこれ中和の本体を指出す、故に慎独は即これ中和を致すなり。」
 (十一卷 浙中王門学案一)

⑦ 王龍溪「一念の微は、只だ慎独に在るのみ。」
 (十二卷 浙中王門学案二)

⑧ 王龍溪「良知は即ちこれ独知、独知は即ちこれ天理なり。独知の体は本よりこれ無声無臭、本よりこれ知識する所なく、本よりこれ拈帶揀択する所なく、本よりこれ徹上徹下なり。独知は便ちこれ本体、慎独は便ちこれ功夫、只これ便ちこれ未発先天の学なり。もし良知はこれ後天に属すと謂はば、未だ体を全くし力を得る能はず、須らく先天を見得て方めて本を張るあるべし。却つてこれ頭上に頭を安んずなり、これ亦惑いなり。」
 (十二卷 浙中王門学案二)

⑨ 王龍溪「万欲紛紜の中、これを一念独知に反れば、未だ嘗て明らかならずんばあらず。これ便ちこれ天の明命にして磨滅すべからざる所在なり。故に慎独の功夫は影響揣摩、欲根を掃蕩する能はずと謂はば、則ち可なり。独知に欲ありと謂へば、則ち不可なり。独知は即ちこれ天理と謂へば、則ち可なり。二物のごときと為せば、則ち不可なり。」
 (十二卷 浙中王門学案二)

⑩ 王龍溪「独知は、念動来て後に知るに非ず、乃ちこれ先天の靈竅にして、念に因て有らず、念に随て遷らず、万物と対をなさず。これを慎む云々とは、これ強制の謂に非ず、只これこの靈竅を就業保護するのみにして、他の本来の清浄に還すのみ。」
 (十二卷 浙中王門学案二)

⑪ 王龍溪「所謂必ず事とするありとは、独なる処、一室にしてこの念は常に炯然として、日々万変に応じてこの念は常に寂然たり。間なる時も能く間ならず、忙なる時も能く忙ならずして、方めてこれ境に転ぜられず。」
 (十二卷 浙中王門学案二)

⑫董羅石「道体は即ちこれ仁なり。仁は只これ一団の生生の意にして、それ要するに慎独に本づく。独を慎んで、その無声無臭の天に還れば、万物一体にして純なるも亦已^やまず。」
(十四卷 浙中王門学案四)

⑬欧陽南野「格物はこれ視聽喜怒の諸事に就いて、その独知を慎みてこれを格^たし、その本然の則^{のり}に循^{したが}つて以てその知を慊^{こころよ}くす。」
(十七卷 江右王門学案二)

⑭聶双江「独なるものは天地の根、人の命なり。学問は只ここにあるのみ、人生はこの件あるのみ、故に天下の大本と曰ふなり。慎独は便ちこれ中を致し、中立ちて和生ずれば、天下の能事は畢れり。」
(十七卷 江右王門学案二)

⑮王塘南「生幾は、天地萬物の従つて出る所、有無に属さず、体用を分たず」「意は、念慮の起滅するの謂に非ざるなり」「独は即ち意の微に入る、一一あるに非ざるなり。意は本より生生にして、惟だ造化の機、充たざれば則ち生ずる能はず。故に学は従収斂より入るを貴ぶ。収斂は即ち慎独たり、これ道を凝ずるの枢要なり」「時に習ふとは、時時に至善を知るを本と為してここに止り、情を約して以て性に復すと云ふのみ。大学の至善に止まるは、即ち中庸の慎独の功なり、二事なきなり。これを舍^おいて更に何をか学ばん」「大抵仏家は出世を主とす、故に一悟すれば便ち了し、更に慎独を言はず。吾が儒は經世学問を主とし、正に人倫事物の中に実修す、故に慎独を喫緊す。但だ独なる処を一たび慎めば、則ち人倫事物は節に中らざるなし。」「致知は悟を主とし、誠意は修を主とす。能く止まるを知れば、則ち性を悟るや徹せり。能く慎独すれば、則ち意を修むるや微なり」
(二十卷 江右王門学案五)

⑯王棟「誠意の工夫は慎独に在り、独は即ち意の別名、慎は即ち誠の用力のみ。意はこれ心の主宰、その寂然不動の処を以て単単として個の慮らずして知るの靈体あり、自ら主張を做^なし、自ら裁し化を生ず、故に挙げて

これを名づけて独と曰ふ」「心体上に幾の動くあれば、則ちこれ念に動くなり。楊慈湖は所以にこれを起意と謂う、而るに「大学」「中庸」の所謂「独」に非ず。「誠意の工夫は、全て慎独に在り、独は即ち意なり。単単として吾心の一点の生幾にして、一毫の見聞・情識・利害の混ざる所なし、故に独と曰う。即ち「中庸」の所謂不睹不聞なり、慎は即ち戒慎恐懼なり」

(三十二卷 泰州学案一)

①⑦馮少墟「君子の慎独は、只これ自家心上の慊意を討ね得るのみ。自ら慊ければ便ちこれ意誠なれば、則便ちこれ浩然の氣、天地の間に塞るなり」

(四十一卷 甘泉学案五)

①⑧高攀龍「人にして聖人に至るべきは、只だ慎独に在るのみ。独なるものは本然の天明なり。人の知らざる所に於て、而れども己の独り知る所なり。是は即ち是たるを知り、非は即ち非たるを知る、思に由りて得るに非ず、慮に由りて知るに非ず。即ち此はこれ天、即ち此はこれ地、即ち此はこれ鬼神、我となく人となく、今となく古となく、総てこれ這個なり。這個の畏るべきを知り得るは、即便ちこれ敬なり。這個を欺瞞せざるは、即便ちこれ誠なり。一一這の本色に依るは、即便ちこれ明なり。」

(五十八卷 東林学案一)

①⑨孫淇澳「睹えず聞こえざるには隠あり、隠にして見(現)あり、見にして微あり、頭あり、乃ち心路中の遞相の次第なり。萬物未だ生ぜざるは隠たり、初めて出づるは見たり、端倪は微たり、盛大は頭たり、実に睹聞せざるは骨子たり、故に総じてこれを独と謂う。君子の慎独は、物の根を栽する時に生意潜蔵し、後來の無窮の景象を包畜するがごとし。」

(五十九卷 東林学案二)

周知のように朱熹が「独は、人の知らざる所にして、己の独り知る所の地」と独を独知に認識し、「その独を慎む」

を「幽暗の中、細微の事、跡は未だ形あらわれずと雖も、幾は則ち己に動く。人は知らずと雖も、己は独りこれを知れば、則ちこれ天下の事は著見明顯にしてこれに過ぐるものあることなし。ここを以て君子は既に常に戒懼すること、ここに於いて尤も謹しみを加う¹²」と解説している。この説を踏襲して、明初の①呉康斎や②胡敬齋等の朱子学者以来、陽明学提唱者の⑤王陽明も、またその弟子の⑥錢緒山、⑦王龍溪、⑧董羅石、⑨歐陽南野、⑩聶双江、さらに明末の新朱子学者⑪高攀龍等は皆、それぞれの思想的立場からの相異はあるが、総体的には独を独知と理解している。

これに対して劉宗周が独を「心に発する意ではなく、心に存して心を主宰する至善無惡の意」と規定して、慎独を誠意と解釈する誠意説を明末に提起するのであるが、それに先行して既に⑮王塘南、⑯王棟、⑰馮少墟、⑱孫淇澳等が独を意と認識する説を提示している。これについて宗羲は、「先師戡山先生文集序」において上記⑮王棟の「意是心之主宰、以其寂然不動之处、単単有個不慮而知之靈体、自做主張、自裁生化、故拳而名之曰獨」をそのまま引用して宗周の思想を解説し、両者の関係について同文中で「師は未だ嘗て泰州（王棟）の書を見ざるも、至理の所在、謀らずして合するなり」と指摘している。又、⑮王塘南（王時槐 一五三〜一六〇五）と⑱孫淇澳（孫慎行 一五六五〜一六三五）については、陽明学の出現後は「流弊甚だ多し」と悲嘆すべき状況が到来したが、「その間、江右の王塘南、昆陵の孫淇澳は皆、卓然として聖学、豈に埋没すべけんや」（『移史館論不立理学傳書』）と評価している。

ところで、本書の他学案に比較して、宗周の行状と思想を記述している戡山学案は「慎独」に関する事項の頻出度が圧倒的に多い。次に、宗周の慎独を考察しよう。

四、「工夫の至る所、即ち本体なり」——慎独の至る所、即ち誠意なり

『明儒学案』は、劉宗周の「師説」で開幕し、「忠端劉念台先生宗周」の蕺山学案で終幕している。『明儒学案』は宗周を顕彰するために著わされた儒学史であると言つても過言ではなからう。遺民であつた宗羲は、この大著によつて宗周の何を明らかにし、何を後世に継承しようと思つたのか。慎独の工夫であり、その工夫の体認を思想的に体系化した誠意説であろう。宗羲は、宗周の慎独を工夫とする誠意説が漢族文化の精華であり、これを継承し復興することが漢族復興であると考へたのではなからうか。

(宗周)先生の学は、慎獨を以て宗と爲す。儒者は(一)人(二)人慎獨を言うも、唯だ先生のみ始めてその真を得。天地の間に盈るは皆、氣なり。その人心に在りては、一氣の流通、誠に通じ誠に復し、自然に分かれて喜怒哀樂、仁義礼智の名となり、これに因て起るものなり。安排や品節を待たずして、自らその則を過ぎざるは、即ち中和なり。これ生まれながらにしてこれ有すること、(一)人(二)人かくの如し。所以にこれを性善と謂ひ、即ち可不及の差なし。而して性体は原より自ら周流して、それ中和の徳を爲すを害せず。学ぶ者は但だ性体を証得すること分明にして以て時にこれを保つ、即ちこれ慎なり。慎の工夫は只だ主宰上に在りて覚に主あり、これを意と曰ふ。意根を一步離るれば、便ちこれ妄、便ち独に非ず。故に愈よ収斂すれば、これ愈よ推致す。然るに主宰もまた一処に停頓することあるに非ず、即ちこの流行の中に在り。故に「逝く者はかくの如きか、昼夜を舍かず」と。蓋し氣を離れて理たる所なく、心を離れて性たる所なしと。

〔明儒学案〕六十二卷 蕺山学案「忠端劉念台先生宗周」

慎独は工夫であるが、この工夫と本体の関係について宗羲は、「心には本体なし。工夫の至る所、即ちその本体なり。故に理を窮むるは、この心の万殊を窮め、万物の万殊を窮むるに非ざるなり」と述べているが、つまり随時随所における工夫の過程に本体の具体的実践の様相が露出していると考えている。

宗周は晩年、慎独の独の本体を心の主宰としての「意」と認識したが、これは慎独の工夫の積み重ねの先に露出した本体を体得したものであろう。

或るひと曰く、「慎独はこれ第二議なり。学ぶ者は須らく先ず天命の性を識るべしや否や」と。曰く、「慎独せざれば、また如何にして天命の性を識得せん」と。

〔明儒学案〕六十二卷 「語録」

宗周は、慎独を工夫とする誠意説を提唱した。¹⁵ この誠意説は宗周の最晩年、明朝崩壊、その動乱における二十一日間に及ぶ壮烈な殉死貫徹行動で、その力量が実証された。そして、この思想と行動は、時空を超えた日本の幕末維新时期、春日潜庵・池田草庵・吉村秋陽・楠本端山等、日本近代化の礎石を築いた志士たちを学問的に支えた儒学者によつて受用され、「誠意」は当時の時代思潮になっていくのである。

宗羲は、宗周の慎独を工夫とする誠意説が漢族文化の精華であり、これを継承し復興することが漢族復興であると考えた。そこで、宗周思想が形成される源泉とも言える明代儒学史における慎独体認の展開過程を『明儒学案』の中に保存し、後世の機を俟ったのではなからうか。

付記

慎独は、『大学』の「小人は閒居して不善を為し、至らざる所なし。君子を見て、而る后、厭然としてその不善を拵い、而してその善を著す。」とか、『中庸』の「その睹えざる所を戒慎し、その聞こえざる所を恐懼す。隠より見（現）なるはなく、微より顕なるはなし。」等の条文から、自己の内面的修養法であつて、他者への経世済民の働きかけを無視しているのではないかと、しばしば誤解されるようである。しかし、実際は例えば宗周が臨終の席で「胸中、万斛の泪あり、半ばこれを二親に灑ぎ、半ばこれを君上に灑ぐ」と言つたように他者への思いやりが強い。『中庸』に「中なるものは天下の大本なり。和なるものは天下の達道なり。中和を致さば、天地は位し、萬物は育す」と明示しているように、天地万物のそれぞれを適材適所に配置して、各人に適合したポジションでその能力を働かせるように支援活動を行う。他者への支援活動の内容や方法が中を得れば、それを「天下の大本」として他者へこれを推及し、支援を受ける他者と和合して、支援者と被支援者の両者がそれぞれに元気になるならば、これを「天下の達道」と言うことができるであろう。それを実現し達成する基本条件が「中和を致す」¹⁶である。「中和を致す」ための本体は、慎独の工夫の至る所に露出するのである。慎独の工夫は、支援者の深層心理から治国平天下までを網羅した工夫である。そこで、宗周は「独の外に別に本体なく、慎独の外に別に工夫なし。これ中庸の道たる所以なり」（『明儒学案』六十二卷「説天命章説」と解説し、次のような提言をしている。

（周）濂溪に主静立極の説ありてより、これを（羅）豫章・（李）延平に伝へ、遂に「喜怒哀樂の未発以前の氣象を看よ」を以て单提の口訣と為す。それ所謂未発以前の氣象は即ちこれ独中の真の消息、但だ前後の際を説き得ざるのみ。蓋し独は中和を離れず、「延平の姑く中に即して以て独体を求め、而して和はその中に在り」は、

これ慎独の真の方便門なり。

〔明儒学案〕六十二卷 「語録」

孫淇澳が⑩資料で説明しているように、「独」の隠から見、見から微、微から頭の展開過程を体認することによって、わが主体における「天下の大本」を立てる活私の工夫が肝心である。この活私の工夫が慎独であり、慎独は「天下の達道」の支援活動を促進する具体的開公活動の中で、絶えず独体の活私活動を省察しな¹⁷おす。その新陳代謝された独体の工夫によって、「新しき道」の本体を発見し、自己と他者を革新（生生）しつづけるのである。

註

- 1 岡田武彦「儒教の本質とその現代的意義」〔儒教精神と現代〕所収 明德出版社)には、中国思想を概観し理想主義(儒教)、現実主義(法家・兵家・縦横家)、超越主義(道家・仏教)の三系列に分け、「いずれも人間の本性にもとづくものであり、したがって人間生活にとって切実なものである」と指摘している。
- 2 『中庸章句』第一章「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」の註。
- 3 『同』同の註。
- 4 『同』同の註。
- 5 『同』第一章「道也者、不可須臾離也。可離非道也。故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。」
- 6 『同』第一章「莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其独也」の註。
- 7 岡田武彦『劉念台文集』(中国古典新書 明德出版社)、拙論「劉宗周の慎独改過説」〔陽明学〕第14号 二松学舎大学陽明学研究所刊)、「劉宗周と黄宗羲の証人書院」〔香椎瀉〕第49号 福岡女子大学国文学会)を参照されたい。
- 8 『明儒学案』卷十六「江右王門学案一」
- 9 黄宗羲の『明儒学案』編集の観点。

- 10 『明儒学案』卷十六「江右王門学案・文莊鄒東廓先生守益」。
- 11 『黄宗羲全集』第十冊（浙江古籍出版社）所収。
- 12 『中庸章句』第一章「莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其独也」の註。
- 13 『黄宗羲全集』第十冊（浙江古籍出版社）所収。
- 14 『明儒学案』「黄梨洲先生原序」（康熙三十二年 一六九三）。
- 15 『劉子全書及遺編（上下）』（中文出版社）
- 16 宗周以前の朱子学や陽明学の中和觀について、宗羲は次のように批判している。
- 「中庸」言致中和、考亭（朱子）以存養為致中、省察為致和、雖中和兼致、而未免分動靜為兩截、至工夫有二用。其後、王龍溪從日用倫物之感応、以致其明察。歐陽南野以感応變化為良知、則是致和而不致中。聶雙江・羅念庵之歸寂守靜、則是致中而不致和。諸儒之言、無不曰前後内外、渾然一体、然或攝感以歸寂、或緣寂以起感、終是有所偏倚、則以意者心之所發一言為崇。致中者以意為不足憑、而越過乎意。致和者以動為意之本然、而逐乎意。中和兼致者、有前乎意之工夫、有後乎意之工夫、而意攔截其間。使早知意為心之所存、則操功只有一意、破除攔截、方可言前後内外渾然一体也。（答董吳仲論學書）『黄宗羲全集』第十冊）。
- 17 活私開公については、佐々木毅・金泰昌編『公共哲学』全十卷（東京大学出版会）参照。